

**Dave McGraw** Drums | **Bryant Moore** Bass Guitar | **Jabrille "Jimmy James" Williams** Electric Guitar | **Ivan Galvez** Percussion  
**Jason Cressey** Trombone, Slide Trumpet | **Gordon Brown** Tenor Sax, Flute | **Greg Kramer** Trombone | **Skerik** Bari Sax

Produced by **True Loves** | Recorded at Studio Litho, Seattle, by Floyd Reitsma | Mixed by Floyd and True Loves | Mastering by Doug Krebs at Doug Krebs Mastering  
Cover photo by Davisuko | Design by Max Ramey | CD Layout by Christopher Ball | Band photo by Jean-Paul Builes



TRUE  
LOVES **SUNDAY  
AFTERNOON**

米国西海岸北部のワシントン州にあるシアトルという街が音楽都市として脚光を浴びたのは、1990年代上半期のことだった。それは、ニルヴァーナ、サウンドガーデン、パール・ジャム、マッドハニーといった、いわゆるグランジ・ロック勢〜彼らはワシントン州シアトル周辺から出たバンドだった〜に大きなスポットがあてられたことに端を発する。また、彼らを初期に送り出した同地のインディ・レーベルであるサブ・ポップにも多大な注目が集まり、シアトルは同時代ロックの一大送り出し地として広く認知を受けたのだった。

そうした動きと、あのジミ・ヘンドリックスの生誕地である（彼のお墓もシアトル郊外にある）ことでシアトルはロック・シティであることを掲げ、EMPという立派な建物を持つ音楽施設を同地在住であるマイクロソフトの共同創設者の出資により運営。EMPとはExperience Music Projectの略であり、ヘンドリックスのトリオ・バンド名にあるエクスペリエンスが引用された。現在、それはMoPOP (Museum of Pop Culture) という名称になっている。

くわえて、音楽の世界でシアトルが注目を浴びたのは、優れたインストゥルメンタリストがシアトルに居住していたからでもある。その代表格が、ドラマーのマット・チェンバレン。エディ・プリケル&ニュー・ボヘミアンズのメンバーとして名を出したシアトル在住の彼は（1990年ごろにはパール・ジャムで叩いたこともあった）、その後はセッション・ドラマーとして大活躍。フォオナ・アップル、ピーター・ゲイブリエル、トリー・エイモス、メイシー・グレイ、ジョン・メイヤー、ブラッド・メルドール、フランク・オーション、デイヴィッド・ボウイ、エルトン・ジョン、モリッシー、ジェイム・カラム等々。ここ10年でも、ランディ・ニューマン、ブルース・スプリングスティーン、ボブ・ディランら大御所作に彼は参加している。

そんなチェンバレンはニュー・ボヘミアンズ時代の同僚ベーンスト

であるブラッド・ハウザー、さらには同地に住むサクソソ他のスケーリックと打楽器奏者のマイク・ディロンらと、インストゥメンタル・バンドのクリッターズ・バギンを結成。パール・ジャムのギタリストのストーン・ゴッサードらが設立したルーズ・グルーヴやフアラやローパドプなどからいろいろアルバムを出す彼らは当時隆盛したジャム・バンド・ムーヴメントの重要バンドにもなり、日本にも複数回来日もしている。また、チェンバレン抜きで他のメンバーはブラック・フレイズとしてアルバムを出し、それでも来日したことがあった。

そうしたなか、特にアシッドなぶっ飛びやイケてるファンクネスも抱えるスケーリックはかなり同シーンの中で注視される存在だった。ギャラクティックのドラマーであるスタン・ムアと特殊ギタリストのチャーリー・ハンターとともにガラージュ・ア・トロクというトリオを組んだり、キーボードのウェイン・ホーヴィッツやドラムのポビー・ブリヴィットら鋭敏なニューヨーク・ボーダレス系の奏者たちとボンガというバンドを組んだこともあった（そのアルバムはルーズ・グルーヴから送り出された）。当時ホーヴィッツはシアトルに引っ越していたが、彼と親しい著名ギタリストのビル・フリーゼールも1989年からシアトルに居を置いた。なお、彼と親しいコルネット奏者のロン・マイルズに昨年インタビューしたら、フリーゼールはまたニューヨークに戻ったと言っていた。

さらに、2000年代に入って以降、トップ級に米国で成功したロック・バンドのフリート・フォクシーズもシアトルに拠点を置く創造性豊かな担い手であるし、2019年7月には「ザ・ディップ・デリヴァーズ」(P-ヴァイン)を出した7人組のヴィンテージ・ソウル・バンドであるザ・ディップがブルーノート東京で公演をしたこともあった。そういえば、同地は現在映画やTVでも活躍するシンガー/ビートボクサー/キーボード奏者のレジー・ワッツも輩出しており、同地の大学で音楽を学んだ彼はマクチュープというシアトル・ベースのロックン・

ソウル・バンドにも在籍。ジャズを学んだ彼はウェイン・ホーヴィッツと付き合を持ったこともあったし、スケーリックのリーダー作に参加もしている。また、彼はソウライヴのフィーチャード・シンガーとしてツアーをし、2004年来日したこともあった。蛇足だが、ピュリッツァー賞を受け映画化もされた「カラー・パープル」で知られる作家/活動家のアーサー・ウォーカーはワッツの従姉だという。

と、冗長にシアトルのミュージシャンのことを書いてしまったが、このトゥルー・ラヴズもまた、そうしたシアトルの闊達な音楽土壌から生まれたバンドである。

結成は、2014年。トランペッターが入っていたときもあるが、トロンボーン奏者が二人いるという編成は面白い。今の構成員は、トロンボーンのジェイソン・クレッシーとグレッグ・クレイマー、テナー・サクソスのゴードン・ブラウン、バリトン・サクソスのスケーリック（本名はエリック・ウォルトン。通常はテナー・サクソスを彼は吹く）、ギターのジミー・ジェイムス、ベースのブライント・ムア、ドラムのデイヴィッド・マグロウ、打楽器のイヴァン・ガルヴェスという面々。ジェイムスとマグロウは“シアトルのソウライヴ”という異名も持つオルガン・トリオのデルヴォン・ラマー・トリオのメンバーでもある（マグロウは今年出た新作には入っていない）。

この「サンデイ・アフターヌーン」は、「Famous Last Words」(True Loves /WarHen, 2017年。デルヴォン・ラマーもレコーディング参加していた)に続く2作目だ。その表題は、<羽目を外す週末が開けた日曜のくつろいだり星下がり>という意味を持つのか。リリース元は英国きってのディーブなジャジー・ファンク・バンドであるニュー・マスター・サウンドスのリーダー/ギタリストであるエディ・ロバーツが主宰するカラー・レッド。米国の聞き手にもしっかり訴求することに成功したロバーツは現在アメリカに拠点を置いており、ユナ

イテッド航空のハブ空港を持つコロラド州デンヴァーにオフィスを置く同レーベルは精力的にプロダクツのリリースを行なっている。

屈指の名手たるスケーリック（このところでは、ウィルコのメンバーでもあるギタリストのネルス・クラインの2020年ブルーノート盤「Share the Wealth」にいい感じで参加している）がメンバーにいることが示すように、本作を聞いてすぐに了解できるのは各メンバーの質の高さだ。そして、一筋縄ではいかない、アレンジ/楽曲構成もまた、メンバーたちのミュージシャンシップの高さを教えてくれる。

JB要素を入れた1や2や8、Aヴレイジ・ホワイト・バンドの十八番曲「ビック・アップ・ザ・ピース」を少し想起させる5、トゥワンギーなギターから始まりブルース・コード進行を活用する4、ファンファーレ調プラス音で始まる7のタイトル・トラック、トロピカルだったリクンピア調を介する3や10など、曲種も自在。また管楽器奏者のソロも図式的にならず臨機応変に組み込まれていて、これはキャリアを積んだ好プレイヤーたちが集まったプラス主体のファンク・バンドであると、大きく頷いてしまう。ギタリストの機を見るに敏な複音多用の演奏やドラムとパーカッションが適切に噛み合うビートに耳惹かれる聞き手もいるだろう。

音楽知識が豊穡で、技量に富み、質感もたっぷり。この「サンデイ・アフターヌーン」はシアトルという街にある音楽力と、長年地域性を超えてインターナショナルに愛好されてきたプラス音が生きた普遍的なジャジー・ソウル表現の魅力をまっすぐに伝えてくれる。とともに、エディ・ロバーツの慧眼が注がれる広義のファンキーな表現を送り出すカラー・レッドというレコード会社の面白さも伝えるアルバムだ。